

院政・鎌倉時代の京阪アクセントの形から生まれたのかを見ることとしたい。ここで特徴的であるのは、一音節名詞から四音節名詞については、動詞に生じたアクセント変化、

- (1) ○●▽↓○●▽ (二音節第二類動詞連用形+テ、例、書イテ)
- (2) ○○●●▽↓○●▽ (三音節第二類動詞連用形+テ、例、動イテ)
- (3) ○○●●↓○●○ (二音節第二類動詞終止形、例、書ク)
- (4) ○○●●↓○●○ (三音節第二類動詞終止形、例、動ク)

が、名詞に及んで行ったと見られるのに対して、五音節名詞の場合にはそのような力が及ばないということである。

二、院政・鎌倉時代における京都方言の型と現代東京方言の形

四音節名詞について調査したのと同様の手続きで、院政・鎌倉時代の京都の五音節名詞のアクセントの型を整理し、それが現代東京方言の形とどのように対応しているかを調べると、表1のようになっている。

(表1)

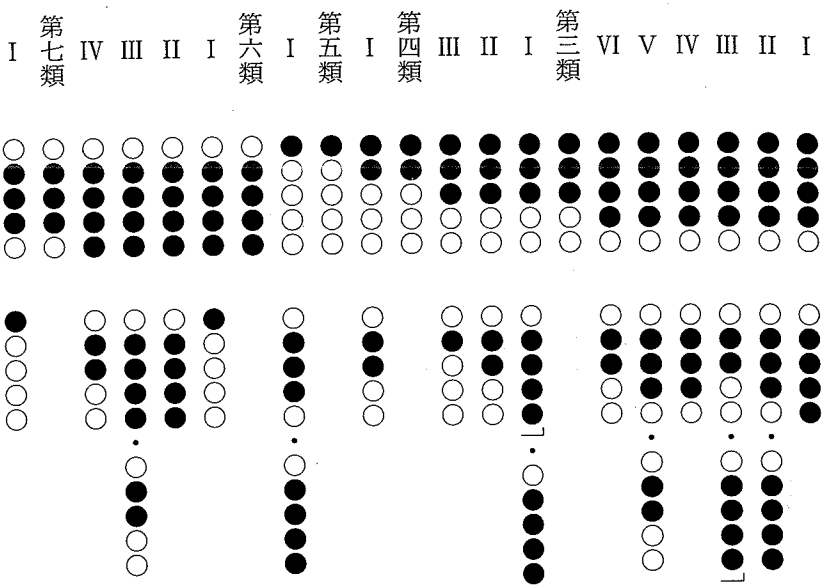
	院政・鎌倉	現代東京
第一類	●●●●	○●●●
I	●●●●	○●●●
II	●●●●	○●●●
III	●●●●	○●●●
第二類	●●●●○	○●●○○

語数 (語例)

五語 (例、ウツハモノ (器))

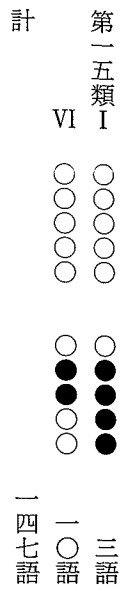
一語 (波太於利米 (促織))

四語 (例、キナカビト (田舎児))



五音節名詞の東京方言アクセント

- 一語 (ヒタヒヒロ (揚))
- 一語 (みをつくし (濤標))
- 二語 (例、イシダタミ (瓶))
- 三語 (例、和太之布祢 (襪))
- 一語 (ゆふづくよ (夕月夜))
- 四四語 (例、サキバラヒ (前駝))
- 一語 (タケノカハ (箆))
- 七語 (例、イハシミツ (石清水))
- 一語 (ミツクロヒ (法用))
- 二語 (例、ますかがみ (真澄鏡))
- 一語 (コシウトメ (妹))
- 一語 (イクピサ、(久如))
- 一語 (ウチミダリ (手箱))
- 一語 (みえがくれ (見隠))
- 一語 (ウサギムマ (驢))
- 一語 (イクピサ、(久如))

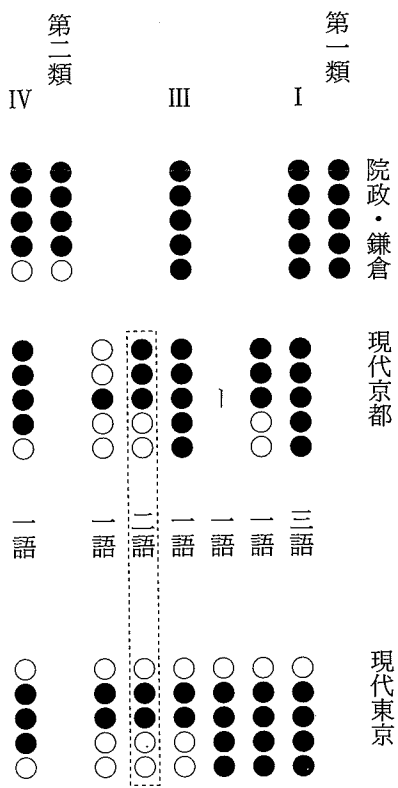


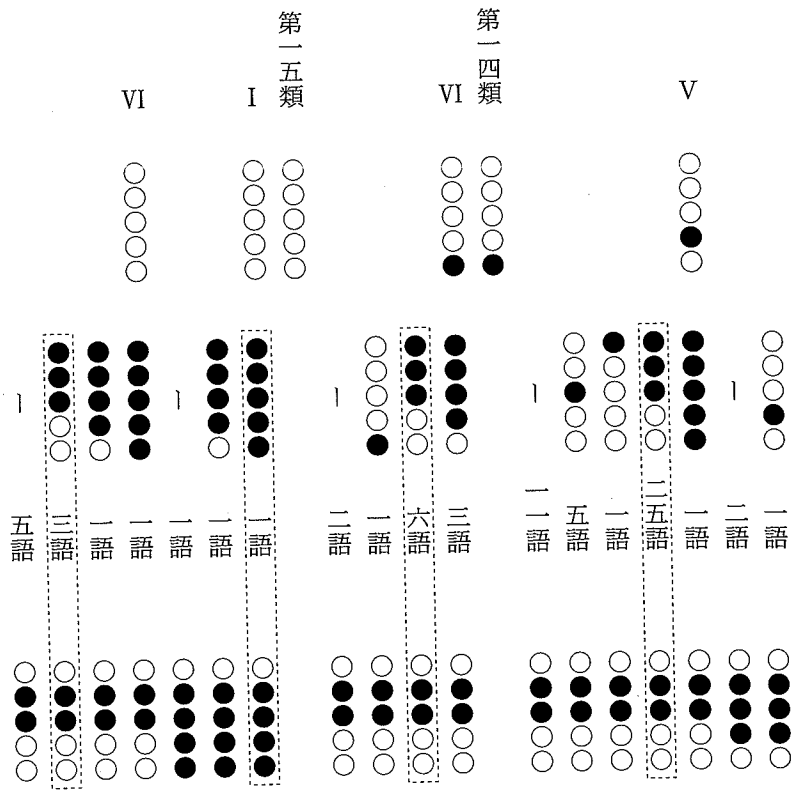
この表を見ると、で囲んだ、第一類 I、第二類 IV、第三類 II のケース（一五語）については、院政・鎌倉時代の京都方言の、語頭に高が連続する形に、語頭の低下が生じた形が、現代東京アクセントの形であると言える。

(二) 第二類 VI・第九類 I・第一三類 V・第一四類 VI・第一五類 VI と 第一類 III・第七類 IV・第二二類 IV・第一三類 IV・第一五類 I

次に、表 2 に現代京都アクセントの形を組み込んだ表を作ると、表 3 の通りである。

(表 3)





これを見ると、第二類VI(二五語)・第九類I(三語)・第一三類V(二五語)・第一四類VI(六語)・第一五類VI(三語)の、で囲んだ例(計六二語)は、現代京都方言の語頭に高が連続する形に語頭の低下が起きた形が現代東京アクセントの形であると言える。語数は少ないけれども、第一類III(二語)・第七類IV(一語)・第二二類IV(二語)・第一三類IV(一語)・第二五類I(二語)ので囲んだケース(計六語)も同じ対応関係にある。

このうち、第一三類Vの「ツバヒラカ」「イナビカリ」は、院政・鎌倉時代の形は○○○○●●であるが、前者は室町時代に●●○○の形に転じていたことがわかり(補忘記)、後者は近松浄瑠璃譜本で●●●○○の形に転じていたことがわかる。また、第二類VIの「ヨミナヘシ」は、院政・鎌倉時代の形は●●●●●●であるが、『和字大観鈔』で●●●●○○に転じていたことがわかる。(4) 彼の語については、いつ現代京都方言の形に転じたのか明らかでないが、院政・鎌倉時代以降現代までの間に転じたものと見られ、現代東京方言の形は、その間に、語頭に高が連続する形に語頭の低下を生じて、出来上がったものではないかと考えられる。

(三)その他

この目で見なおしてみると、次の場合にも、現代京都方言の語頭に高が連続する形に語頭の低下が生じた形が現代東京方言の形であるという例が認められる。

	現代京都方言	現代東京方言
第一類II	一語 波太於利米 ●●●●●●	○●●●●●
第二類III	一語 イシダタミ ●●●●●●	○●●●●●
第二類V	一語 ゆふづくよ ●●●●●●	○●●●●●

●○○○○

四、○●●●●「○○○○○」

現代東京方言アクセントに認められる型で、上の考察に出て来なかった型は○●●●●「」と●○○○○○とである。
○●●●●「」は次の語に実現している。

イキドホリ・ココロザシ・ココロバセ・タケノカハ・タナゴコロ・ハカリコト

このうちはじめの五語は○●●●●の形でも行われている。○●●●●は○●●●●「」の形でも実現しやすい形なのであろう。

次に●○○○○は、「イクビササ」という疑問詞の例と、「あまつかみ」(天つ神)とである。頭高の●○○○○については、四音節名詞・六音節名詞のそれと合わせて、別に扱うこととしたい。

五、結 論

動詞に生じたアクセント変化の影響を受けなかった五音節名詞の場合、東京アクセントの形は、大筋としては、院政・鎌倉時代から現代までのいずれかの時期に、統成的機能の獲得を志向して、京都アクセントの、語頭に高が連続する形に、語頭の低下を起こさせることによって、生じたものと説明することができる。

ただ、本稿では、京都方言のアクセントが、院政・鎌倉時代以降、なぜ次のような変化をしたのかということについては説明を試みていない。

院政・鎌倉時代 現代京都市方言

第一類 III	●●●●●●	●●●●●●
第二類 VI	●●●●●●	●●●●●●
第七類 IV	○●●●●○	○●●●●○
第九類 I	○●●●●○	○●●●●○
第一二類 IV	○●●●●○	○●●●●○
第三類 IV	○●●●●○	○●●●●○
V	○●●●●○	○●●●●○
第一四類 VI	○●●●●○	○●●●●○
第一五類 I	○●●●●○	○●●●●○
VI	○●●●●○	○●●●●○

なんらかの原因で第二類VIの変化●●●●●○↓●●●●●○が起き、第三類に合流すると、●●●●●○の型が多数の語をもつこととなり、少数の語しかもたない型の語がこの型に統合されていったというのが、大きな流れではないかと思われるが、今後の課題である。

注

- (1) 拙稿「モーラ方言アクセント(京阪式アクセント)・シラビーム性モーラ方言アクセント(東京式アクセント)・シラビーム方言アクセントの分離は、いつ、どのようにして、なぜ生じたか」(愛媛大学教育学部紀要(二)七―二 一九九五・二) 同「四音節名詞における東京式アクセント」(築島裕博士古稀記念会『築島裕博士古稀記念国語学論集』 汲古書院 一九九五・一)
- 同「四音節名詞における京阪アクセントと現代東京アクセント」(愛媛大学教育学部紀要(二)八―二 一九九六・二) ほか。
- (2) 所属する語のすべてを列挙した表を作成しているが、紙幅の都合で省略する。

- (3) 坂本清恵『近松世話物浄瑠璃 胡麻章付語彙索引体言篇』(アクセント史資料研究会 一九八七・一)による。
- (4) 稲垣正幸「釈文雄「和字大観鈔」のアクセント」(都留文科大研究紀要 一九七九・六)による。ただし、同じ第二類VIの「サザレイシ」は、『和字大観鈔』に、古い形の●●●●●のままで見える。
- (5) 第一三類Vの「モノガタリ」「ハナガタミ」や「ヤマトウタ」の近世の形は、院政・鎌倉時代の形○○○○●○○から現代京都方言の形●●●○○への変化の中での位置が明らかでない。
- (6) 第一類Iの「クルマザキ」も京都方言アクセントが示されていないが、院政・鎌倉時代の形から説明できる語であるから、数えていない。